

一般社団法人日本社会福祉学会第 62 回 秋季大会 報告

日本社会福祉学会第 62 回秋季大会を終えて

日本社会福祉学会第 62 回秋季大会 大会長 田中 英樹 (早稲田大学)

日本社会福祉学会第 62 回秋季大会の開催を会員にアナウンスした昨年の春ごろ、早稲田大学にかつて勤めていたある教授から自著書の謹呈があった。そこには、手紙が添えられていた。私文書であるので一字一句の紹介は控えるが、そこにはこんな意味のことが書き添えられていた。「早稲田大学で社会福祉学会の全国大会が開催されることは慶賀の至りであり、欣快の極み」であると。先生は社会福祉の理念を社会学の立ち位置から掘り下げ、福祉と社会学との邂逅の歴史を解題したものだ。

悩みながらも本大会のテーマを“社会福祉は日本の未来をどう描くのか”に設定させて頂いたことや、大会シンポジウム「未来から求められる社会福祉の貢献を考える」も、近接する領域でこれまであまり論じてこなかった建築やまちづくり、環境や労働、学校や司法、産業や商業あるいは人口の変動などの関係と社会福祉を過去・現在・未来という時間軸の視点から、とりわけ未来からのダウンロードを中心にクロスオーバーさせた議論を企画したことも、今では時宜に適っていたと考える。ここ早稲田大学の創設者である大隈重信は、1905 (明治 38) 年に渋沢栄一らとともにハンセン病者の母と言われるハンナ・リデルの支援を通して福祉実践の価値をととても評価していたと言われる。また、奥様は精神医療の黎明期である明治 35 年に呉秀三に協力して精神病者救済会の設立に参加している。2003 年度から社会福祉学が位置づけられた健康福祉科学科は、人間としてよりよく生きることが実現できるように、今日的な諸問題を学際的に解明することを目指している人間科学部の中であって、人が、身体的にも精神的にも社会的にも、健やかで安心して豊かに暮らしていくための、社会システム、支援の方法、科学技術などを総合的、多角的に学び、追求していく学科である。その中で、社会福祉学を軸とする私たち保健福祉系は、人間の尊厳と Well-being の実現をめざした教育・研究を行っており、保健と福祉に関する幅広い学びを重視し、社会の様々な分野で人々に貢献できる人材を育成することを目指して社会福祉専門教育を担ってきた立場から本学会の開催は、なるほど「慶賀の至りであり、欣快の極み」であった。

先の大会案内で「今年で創立 132 年になる早稲田大学はもとより、1987 年に創設された人間科学部としても初めての本学会大会の開催であり、大変光栄に受けとめています。関係する学会員は少ないのですが、心を込めた“おもてなし”ができるように準備しています」と言明したが、振り返るとそんなに出来たという自信はない。むしろ不安とひやひや感の連続であった。

前日から人間科学学術院の少ない福祉系の教職員と学生たちで夜遅くまで準備しながら、ようやく開催が実現するのだと思うと、前夜はやや興奮していたのか寝つきが悪かった。1 月 29 日 (土) 大会初日はやや肌寒い午前 8 時から準備をした。天気も良く午前 9 時には、会場の国際会議場 (井深ホール) に全国から参加者たちが続々と集まってきた。いよいよ始まるという思いが気持ちを引き締めさせた。午前中は、①若手研究者のためのワークショップ ②留学生のためのワークショップが 2 会場で行われた。大会長である筆者は書籍コーナーや会場の進捗状況を点検する仕事で腰を落ち着ける暇もなく、午後からの開会式 (開会宣言)・学会賞授賞式と、それに続く大会校企画シンポジウムの座長もしており、大会の全体を見ることはできなかった。夜は、大隈ガーデンハウスでの情報交換会で遅くまで参加者らと談

笑した。翌大会 2 日目の 30（日）は、午前中に井深ホールで「リスク社会に向けた社会福祉の展望」をテーマに国際学術シンポジウムがあった。内容は聴きごたえがありすばらしく、もう少し参加者がいてほしかったと思った。また、6 題 22 本の特定課題セッション、237 本の口頭発表、96 本のポスター発表と午後 3 時 30 分まで続き、11 号館、14 号館など商学部等の校舎もお借りして何とか無事に乗り切った。

もう早稲田として学会大会を開く御縁はないと思うが、この大会には全国から 1,200 名近い参加者があった。運営では大きなハプニングや大学や参加者からのお叱りはなかったが、開催校としては反省点も多い。まず、特定課題セッションや口頭発表等の数が多いことで動線が伸びすぎてしまい、参加者が極めて少ない会場があちこちに出来てしまった。これは、発表者が多いことも一因であるが、発表時間をやや短くして一会場の参加者を増やす工夫も必要かと思った。また、特定課題の発表や日中韓の国際シンポジウムなど同じ時間枠でこなすことでより参加者を分散させてしまったことも改善が必要と思われる。課題発表は絞った方が良かったかも知れない。盛り込みすぎたきらいがあるが、これらの改善は、今年行われる久留米大学に大会運営委員会として引き継ぐ課題である。会計処理も大変な作業であった。キャンセルや返金や問い合わせなどの実務を殆ど若手の先生にお願いしたが、しっかりやって頂き、とても感謝している。ボランティア学生の募集と采配も若手教員にお世話になったことにも感謝したい。また、学会事務局である国際文献社の大会ヘルプデスクの強力なサポートがあったからこそ大会を無事終えることができたと思う。早稲田大学の学生の皆さんにもお礼を申し上げたい。「やる時はやる」普段見せない真面目に働く姿には心から感動した。

ともあれ、社会福祉学のすそ野の広さや求められる課題の大きさに参加者も実感した大会となった。改めて全国からそしてお隣の韓国、中国からご参加頂いた皆さまに、開催校を代表して心よりお礼を申し上げます。